

七夕カップル

八月上旬に大崎下島^{おおさきしもじま}で行われる七夕納涼祭は、大崎下島で一番大きな夏祭りだ。この日、道路沿いには七夕の笹^{ささ}が並び、メイン会場の港では、ステージ^{ステージ}の催し^{もよおし}に加え、二千発あまりの大きな花火が揚がる。間近で揚がる海上花火に毎年訪れるファンも多い。私もその一人で、隣島^{となり}の大崎上島^{おおさきかみじま}から毎年、おばあちゃんややってきていた。けれども、今年はおばあちゃんではない。

「昔、七夕って七月七日なのに変だなあと思っていたけど、おばあちゃんに言わせると、もともと旧暦の七月七日の行事なんじゃけえ、八月にするのがほんまなんだって……。」

晋介は、私の話にうなずきながら空を見上げた。満天の星空の中に花火が大輪となって夜空を飾る。晋介は、それをうっとり眺めながら、私の手をにぎってくる。その手を振り払うと、晋介はいつものように苦笑する。

「なんでだよ。もう付き合い始めて三か月だろ。いいじゃないか。」

「だめよ。みんなが見ているし……。」

「東京じゃ、みんな平気で手をつないでいるよ、僕が嫌いなのか？」

「そういう問題じゃないよ。東京だろうがどこだろうが、人前で手をつなぐなんて私はできないよ。」

「織絵は固すぎるよ。」

晋介の言葉に、私は黙ってうなだれるしかなかった。

晋介はこの四月に、大崎上島にある私達の学校に東京から転校してきた。長身で、少し悪っぽい風体^{ふうたい}をしていたが、成績も優秀で、すぐに野球部でピッチャーとして活躍するなど運動神経も抜群で、たちまち学校中の女子の注目をあびた。そんな晋介だったから、交際^{せんぱう}を求められた時は、やっぱりうれしかった。また、カップルとして、周りから羨望^{せんぼう}のまなざしを浴びるのは悪い気分ではなかった。それに、交換日記をしていて分かったのだが、晋介も私と同じように、それぞれ家庭の事情で島のおばあちゃんの家^{いへ}に預けられたのだった。同じ境遇であることを知り、人に話せないようなことも二人の間では話せるような親密な関係になつていった。他愛のないことから将来の夢まで夢中になつていろんなことを話すうち、毎日、登下校から放課後まで、ほとんどいっしょに過ごすようになった。そして、私の頭の中は晋介のことといっぱいになつていった。それは晋介も同じようだった。

けれども、一学期の懇談会は最悪だった。交換日記に夢中になつたせいで勉強がおろそかになり、成績が落ちた。先生の話では晋介も同じだという。そればかりか、野球部も練習をサボってばかりいるので、夏の大会はレギュラーを外されたという。びっくりしたのは、私たちが手をつないだり、もうキスをしたりしているというわさが学校中に流れているという。

「キスなんてしていないし、手もつないだりもありません！」

私は涙目で先生に訴えたが、おばあちゃんは、

「ばかだね。そんなことは分かつとるよ。けど、それでも、そんなうわさがたつのはあんたが悪い。それが世間^{よこしま}というもんだと、あれほど教えてやつたらう。」

と、先生といっしょに私を叱^{しか}る始末だった。



頭がぐちゃぐちゃになって、私は晋介との交際を問題視する先生やおばあちゃんにも反発した。今日の七夕納涼祭のデートもさんさん反対されたが、私は反対を無視してやってきたのだった。けれども、一方で懇談会の帰り道で、おばあちゃんが言った言葉がずっと心に引っかかっていた。

「あなたのことはともかく、晋介君のことはちゃんと考えんさいよ。七夕でデートもええが、牽牛けんぎゆうのようにだめな男にしたらいけんよ。」

私は、晋介にレギュラーから外されたことをなぜ黙っていたのか聞いた。「黙っていて悪かったよ。織江が気にすると思ってさ。デートを優先して練習を無断で三回くらい休んだんだ。たったそれだけの理由で監督はレギュラーを外したんだぜ。俺が出なけりゃ一回戦は間違いなくコールド負けなのに。でもおかげで、こうして堂々と練習をサボってデートできるようになったし、よかったのさ。」

そんな晋介の言葉に、私はなぜだか涙がこみあげてくるのを抑えきれなくなって、呼びとめる晋介を置いて走り出していった。

そして、そんな七夕デートの二日後、私は、私の決心を晋介に伝えた。

「晋介、私たち別れよう。」

「なんで？」

晋介は驚いたように私を見た。



「晋介、七夕の話は知ってるよね。織姫と牽牛。この二人はとても働きもよかったので、神様は、ご褒美ほうびに二人を合わせたんだよね。でも、そして二人は恋に夢中になって、仕事をしなくなったんだって。それって、今の私たちそのものだと思わない？」

「そんなことはない。僕は大丈夫だ。成績だっけすぐにもとに戻してみせるさ。」

「そうかもしれない。でも、私はそうはできなかったし、晋介もできなかった。だから、私たちは、やっぱり別れた方がいいと思うの……。」

「僕が嫌いになったのか？」

「ちがうよ。好きだから別れようと言っているの。晋介の夢は甲子園なんですよ？」

「そんなばかな話があるか。」

晋介には分かってもらえないまま、私たちはそうして別れた。

そして、長い夏休みが終わり二学期が始まった。晋介とは普通の友達に戻りたかったが、そうはならなかった。晋介は私に全く口を利かなくなった。私は何度も話しかけようとしたが、晋介と会うたびに胸の中に鈍い痛みが走り、できなかった。その痛みから逃れるように、私は勉強に没頭した。そして、とうとう卒業式まで、二人は口を利くことはなかった。そして、私と晋介はそれぞれ別の希望校に進学し、会うことはなくなった。晋介は島を出て、甲子園を目指している有名私立高校へ進学した。

一年後の七夕納涼祭の日、私は朝から晋介のことばかりが思い出されて胸が痛み、家に閉じ込もっていた。夕方になって一本の電話があった。晋介からだった。

「織姫さん、いますか？野球部の鬼監督から年に一回の休みをもらったんだけど、会えませんか？こちらは、改心してがんばっている牽牛です。」

私たちは、七夕カップルとみんなに呼ばれるようになった。